

知的障害の娘キャロルの晩年と母パール・バックの生涯

—Janice C. Walshの視点—

Akari YAMASHITA Nobuo HIROSE
山下 明莉*・ 廣瀬 信雄**

I. はじめに

ノーベル文学賞作家パール・S.バック（Pearl Sydemstricken. Buck, 1892-1973）に知的障害の娘キャロル（Carol Buck, 1920-1992）がいたことはよく知られている。そして、この作家には珍しい私小説The Child Who Never Grew（邦訳：母よ嘆くなかれ、松岡久子 訳1950、伊藤隆二 訳1993、共に法政大学出版社）が娘キャロルの存在を公にした。本書は世界の多くの国で翻訳され、1950年以降、まだ専門家も専門書も少ない時代にあって多くの親たちを支えたとされている。

しかし、この「母よ嘆くなかれ」に描かれているのは、娘キャロルの人生としては、幼いころからVineland Training School（1）に入所してしばらくのことまで、また母パールにしてみれば、50代までの人生が背景になっていて、その後については当然のことながら語られていない。パール・バック研究の立場から、あるいは処遇史、人物史研究の視点からは、二人のその後について示す資料が必要であった。

以下に示す、訳文は「The Child Who Never Grew」（Woodbine House, 1992年版）のあとがき（本文中、91-107）として添えられた貴重な一文の訳である。著者は、母パール・バックの最初の養子 Janice C. Walshである。彼女は、実の娘ではないが、キャロルの妹にあたり、キャロルのその後の人生、および母パールの晩年について描いている。これまであまり知られていなかった彼女のその後について、ある程度の情報を持って埋め合わせてくれる資料と考え、訳出しを試みた。

なお、Janice C. Walshについては原注として次のような記述が付されている。

Janice C. Walshはキャロル・バックの妹であり、法的後見人である。彼女は、パール・S.バック財団の理事長であり、またニュージャージー州のVineland Training Schoolの理事を勤めている。彼女は精神遅滞者の作業療法士として仕事をしている。

II. Janice C. Walshによる母パールと娘キャロル像

あとがき Janice C. Walsh

私は1972年の夏のある日を覚えています。その日は、私の母がキャロルに会うために最後に訪

* 山梨大学大学院教育学研究科修士課程教育支援科学専攻

** 山梨大学大学院教育支援科学講座（障害児教育系）

れた日です。母は私に学校まで運転するように頼みました。そして、それには私の妹のジーンも一緒でした。母は、私たち二人をキャロルに再び会わせかけたようです。なぜなら、母はキャロルに再び会うことができないかもしれないということを知っていたからです。じきに診断されることになる肺がんの症状を母は感じ始めていたのです。

私たちはキャロルのコテージに到着しました。それは、二階建ての黄色いレンガの建物で、母が何年も前に寄付したお金で建てられたものでした。キャロルの部屋に入ると、そこは1930年代のフランスの田舎のベッドルーム風に塗られた家具付きの広くて明るい、風通しのよい場所でした。また、他にも素敵なお風呂や三面に窓があるプレイルームもありました。母は背もたれの高い椅子に座り、ジーンは窓側に腰かけ、私は近くに立っていました。母はキャロルにゆっくりと簡潔に話しました。この二人の訪問者は誰なのかを。まず初めに、キャロルはいくぶん困惑しているように見えたのですが、それから彼女は私の方を振り返りました。そして、彼女は持ち前の有無を言わせないやり方で私に座るように言いました。すると母は、私の名前を数回繰り返しました。私は熱心にキャロルの顔を見ました。そして、母が「ジャニス」という言葉を繰り返すにつれて、キャロルの表情が困惑から理解に変わっていく様子がわかりました。私はその時、ある責任が母から娘に移ったことを知りました。私は母の顔をまじまじと見ました。そして、彼女がこの訪問の中で望んでいた静かな安らぎと落ち着きを見て取りました。その時こそ、私とその責任を受け入れるための時間でした。その責任とは、キャロルが彼女の身内を持ち続けることを約束するものでした。私は彼女の過去、そして現在をつなぐ役目になるのです。

私たちが共有している過去については、The Child Who Never Grew (邦訳：母よ嘆くなかれ)の中で語られています。しかしながら、その本が出版されてから長い時間がたっています。その間、新しい章がキャロルの人生に加えられてきました。また、母はその本の中でいくつかの問いを曖昧なままにしてありました。私ならば、今やそれをありのままに答えることができると思っています。つまり、これはキャロルの物語であり私の物語でもあるのですが、主にキャロルのものであり、彼女がどのように成長したかを私の記憶から書き起こしたものです。

両親であるパールとロッシング・バック (2) の養子に私になった時、キャロルはちょうど五歳でした。私は育ちが悪く、生まれて以来十分に体重が増えていないやせこけた生後三か月の子どもだったのです。もっとはっきり言えば、私はこの数か月間でさえも生き延びられないだろうと思われていました。私を養子にした母は、実は、彼女自身が生んだ子どもが満たすことができなかった期待をかなえるような子どもが欲しかったようです。そして、母は乗り越えなければならない障壁があったにもかかわらず自分の夢を達成しようと心に決めました。

キャロルと私が中国で生活していたころは幸せでした。私たちは一緒に遊び、太陽、風、そして大地などの自然の音や風景を求めながら自分たちの生活を共に楽しんでいました。しかし、キャロルは期待されるようには成長しませんでした。だから、私は彼女をすぐに追い抜いてしまったように思いました。でも、私は姉と自分が違っていったというような記憶はありません。

「母よ嘆くなかれ」にはキャロルについての私の父の気持ちは記載されていないのですが、母パールと父ロッシングの二人ともキャロルの発達が遅いことと、彼女が一定のレベル以上の勉強ができないことについて心配していたことを私は知っています。私の姉の謎に対して二人とも答えを探し求めていました。母は敗北を認めることや、この現実を受け入れることができないとて

も意志の固い人だったので、常にその説明や、またキャロルをよくするための奇跡を探し求めていました。一方、ロッシングは自分の仕事に没頭することができていました。1916年に彼は南京にやってきました。そして、とりわけ中国の小麦生産地において、アメリカの農業の方法を教えたり、紹介したりしようと決心したのです。それ以来、彼は第一人者となり、南京大学（3）の農業経済学、農場経営学、地方社会学、そして農場機械学の指導者になりました。ロッシングは長期にわたって目覚ましい業績を上げ、その仕事によって中国でよく知られるようになりました。

ロッシングが私の母の話の中に含まれていないもう一つの理由は、彼らの歩んでいる道がこのころに離れた方向へゆっくりと進んでいたことです。パールは一人の作家としての可能性を見出しつつあったのです。というのは、彼女自身の根の深い不安のやりばを見つけることが必要だったからです。その別れが現実的になったのは、キャロルが家を離れて、何年もたってからでしたが、しかし、彼らの離婚について、母はこの物語に組み入れることを明らかに望んでいないようでした。

私の両親が離婚した後の年月、両者の間には、たとえあったとしてもごくわずかしかコミュニケーションがありませんでした。そして、母と私が中国を去った時からロッシングとの関係を持つことを私は母から禁じられていました。ロッシングは、中国に留まり、結局再婚しました。彼とその中国人の妻の間にはとても優秀な二人の子どもができました。彼らは遺伝的な問題を特に持っていませんでした。私たちの母が亡くなった1973年に、彼と再会して彼が私たちを失ってどれだけ寂しく思っていたかを私ははじめて知りました。彼はキャロルと私の幼いころの写真をくれました。それは、離婚の後、私の母が家族の写真をすべて返すように頼んだにもかかわらず、彼が長い間ずっと持ち続けていた写真でした。ロッシングは1975年の11月に亡くなりましたが、それ以前に家族としての関係を再び結ぶ機会はありませんでした。

1929年にキャロルが私から引き離されたあの日は私は覚えていません。私がわずか四歳で、彼女が九歳の時、彼女はニュージャージー州のVineland Training Schoolという施設に入りました。今ならば、私はそれが最善だったとはっきりわかるとしても、キャロルとの別れは私たちがお互いに快適だと感じていた家族を壊しました。キャロルと私は本当の姉妹のように仲がよかったです。もっとも私が、自分の気持ちを自覚したり、表現したりするには幼すぎたのですが。

年がゆっくりと過ぎ、私は学校の寄宿舎生活を重ね、自分の道を進み続けていました。私が家を出てからとても長い時間がたっていたので、私は望んでいたとしても、私の姉を訪問して一緒に時を過ごす機会がありませんでした。とはいえ、私は両親や他のきょうだいとも久しく会っていませんでした。私のきょうだいは私より十一歳、十二歳若く、私たちは共通の関心ごとが全くありませんでした。

毎年、キャロルとの触れ合いは夏に起きました。その時、彼女は一週間ほど、帰省のためにペンシルベニアの家に帰ってきていました。Training Schoolの寮母さんは彼女の世話のために一緒に来ていました。なぜなら、どのようにキャロルが私たち家族になじむのか、また、私たちがどのようにキャロルに合わせられるのかについて、誰一人確信を持てなかったからです。概して、私たちはかなりうまくやっていたと私は考えています。キャロルは帰省の間、私たちをよくわかっていただいていたように思えました。そして、私たちは浅いプールの中で一緒に遊ぶというような活動に彼女を誘っていました。しかし、すでに彼女は自分自身の生活を持っていて、それはもはや私た

ちの生活の一部ではなかったのです。いつも、彼女は一人でいることができますし、彼女自身のやりたい活動をしていました。

私がオハイオ州のAntioch大学（4）に入学した時、私も自分の人生を見つけました。そこで私は作業療法について学びました。それは、私が持つ二つの関心を組み合わせた新しい分野で、医学と当事者の両手の作業を通じた精神の創造的な活用でした。数年間学び、インターンシップを経て、私は作業療法士になりました。そして1949年からこの分野で働きはじめました。長年、私は精神障害者と共に働き、それから老人ホームで働き、そしてここ七年間は精神遅滞の人と共に働いています。

私が自分の仕事を始めてから約一年後、「母よ嘆くなかれ」の初刊本が公開されました。奇妙に思われるかもしれませんが、私はその出版を知りませんでした。一つ目の理由は、私はもはや自分の家に住んでいなかったため、この本の仕事を終えた両親からの手紙の束や訪問に気づかなかったことです。もう一つの理由は、母が想像力豊かで、多作な作家だったことです。私は、どの本の内容も彼女と議論したことがありません。例外があるとすれば、それは、母がジョン・セッジというペンネームを使って、他でもなく中国の話題について書くときです。だから、キャロルについての真実を明らかにすることを決心するのに、私の母は強い心の葛藤をしたはずなのに、その決心はどのような形でも全く私に影響がありませんでした。

1960年代のいつのことだったのでしょうか、私が短期間帰省したある時、キャロルの精神遅滞の理由がわかったと母は私に話しました。キャロルはPKU（フェニルケトン尿症（5））と呼ばれる稀な病気でした。その症状は必須アミノ酸であるフェニルアラニン代謝することができないことで生じるものでした。精神遅滞の原因となるだけでなく、PKUは金髪、青い目、皮膚の湿疹、そして強力なカビ臭いにおいと関連していました。そして、それはひよっとしたらタンパク質を吸収することや、分解することができないためによるものかもしれません。（キャロルにはそのような特性が全て当てはまりました。）その症状は遺伝的に起こり、母の遺伝子とロッシングの遺伝子の両方から引き起こされたと母は私に説明しました。私たちがPKUについて知った時、おむつの尿サンプルを検査することによって状態を診断する方法も開発されました。今日、簡単な血液検査によって新生児の症状を発見することができます。そして、フェニルアラニンを摂取しないようにする食事療法によって精神遅滞の進行を予防することができるようになりました。

母はキャロルの精神遅滞の原因がわかったことについて、複雑な心境であったと私は思います。自分がその原因の全てではないと知った時の母の安堵を私はよく覚えています。しかし、同時に、彼女が自分の家族の遺伝子がこの障害の一因となっていたかもしれないということを受け入れるのは大変だったようにも感じました。母の兄弟姉妹であるエドガーとグレースも障害のある子どもがいました。（エドガーの子どもには重度の脳性まひがありましたし、グレースの子どもには重度の吃音がありました。）

PKUのための検査や治療法は、キャロルの精神遅滞を防ぐには発展が遅すぎたことはあるけれども、私の母が書いたこの題名の本はいささか誤解を招きやすいものでした。キャロルはPKUにもかかわらず、身体的にも精神的にも成長していきました。何年にもわたってのことですが、Vineland Training Schoolの献身的なスタッフの愛情のこもった世話や配慮のおかげで、彼女自身の潜在的な能力の達成を私は目の当たりにしました。彼らは彼女の一步一步の成長を支援しました。スタッフは自らに託されたキャロルの生活や成長の面の成就を確実にする責任を常に肝に

銘じていました。

キャロルは人生の大部分の間、昼間は学校に行っていました。彼女は学校を楽しみましたし、彼女が日常的に行っていた活動も楽しみました。そして、規則正しい生活は彼女にとって好ましいものでした。私は、彼女に教えることは簡単ではないと思っていましたが（彼女の注意持続期間は短く、とても勝気な性格でした）、しかし、彼女は長い時間をかけて多様な学力や役立つスキルを獲得しました。彼女は決して読み書きを学ばせませんでした。色を塗ることを学んだり、自分の名前を書いたり、自分の欲求を言葉にできたりしました。また、簡単なものを縫うことを学び、自立を高める身の回りのスキルも習得しました。彼女は少し指導をすれば、一人での入浴や服の着脱、靴紐をむすぶこと、一人でトイレに行くことや歯みがきを学び、そして、言葉がけによってくしやブラシで髪をとかすことを学びました。さらに、彼女は箸の使用をあきらめた後、フォークやスプーンを上手に使えるようにもなりました。実は、学校生活の最初の十年間、彼女は箸を好んで使っていました。

教室の外では、キャロルは主に二つの活動に夢中になっていました。それは、音楽と運動です。「母よ嘆くなかれ」の中で語られている音楽への愛情はさらに深まり続け、おそらくキャロルにとって最も穏やかになることができる支えとなりました。彼女のコテージにはアップライトのピアノがありました。それは、母が二人で一緒に童謡を歌う時に弾いていたものでした。また、キャロルは自分の蓄音機の操作を学び、好みに応じて何でもかけました。例えば、子どもの歌もあれば、モダンミュージックもあれば、クラシックシンフォニーもありました。キャロルは実際に、子どもの歌や手遊び歌が好きで、その音楽に合わせて歌ったり、ハミングしたりしました。彼女はその歌や歌の演奏が好きではないとき、レコードを変え、たくさんのレコードの一番下に置きました。レコードが廃れはじめると、キャロルは音楽を聴くためにラジオをいつも持っていたことを私はよく覚えています。彼女は楽しそうにラジオをあちこちに持ち運んでいました。しかし、彼女はラジオをよくなくしてもいました。それは特に、コンセントを抜き忘れたままにしたときでした。私は一年に約二回彼女のラジオを探して彼女に戻したものです。

また、キャロルはいろいろなスポーツで注目すべき才能も示しました。それは、ひょっとしたら、彼女の身体能力がPKUの人々の平均よりもはるかに高かったからなのかもしれません。子どものころに、彼女はローラースケートを乗りこなしていました。また、自分の三輪の自転車が大好きで、人生の最後の数年までいつも庭中を乗り回していました。彼女はスペシャルオリンピックス、主にランニングイベントにおいて秀でていて、数年前にはバスケットボールの見事なシュートがみられました。

キャロルは成長するにつれ、簡単な職業的課題の訓練を受けました。おそらく、彼女が五十代のころ、時々学校の運動場で行われるワークショップに参加したことがあると思います。残念ながら、この努力は長くは続かなかったのです。第一に、キャロルの注意持続期間は短かったため、彼女を仕事へ注目させ続けることは困難でした。第二に、彼女の手先の微細運動スキルは素晴らしかったけれど、部品と部品がうまく合わなかった時に、すぐにイライラしてしまいました。第三に、彼女が学校で受けていたような一對一の指導が少なかったことです。彼女はずっと付き添ってくれるような指導なしでは、うまく作業ができませんでした。ついに、Vinelandのスタッフは、職業技能訓練を続けることがキャロルにとってベストではないことを判断しました。そのため、他の方法が彼女のために始められました。

キャロルは学校のSenior Enrichment Program（高齢者の生活充実プログラム）の積極的な参加者になりました。彼女は、自分の年齢と同じくらいの高齢者グループで、彼女の年齢と力にふさわしい活動に参加し始めました。そのグループのメンバーは散歩をしたり、料理をしたり、クラフト活動に取り組んだりしました。そして、どこの地域密着型の高齢者センターの中でもみられるようなその他の多様な活動にも参加しました。全ての活動はスタッフによって行われ、そのスタッフは継続してキャロルや他の参加者の能力が改善するように支援し続けました。

精神面や身体面の成長に加えて、キャロル自身のパーソナリティも発達しました。彼女はときどき人見知りをするけれど、いつも親しみやすく、社交的な人でした。彼女はたまに深い思いやりを示しました。それは例えば、私の肩に手を置いたまま、私の顔をじっとのぞき込んで、「ハニー」と呼んだのです。彼女は大声で、命令的に要求をする人であったけれども、親切に、しつこくしっかりと訂正されると、たいていの彼女の振る舞いは改善しました。概して、彼女は、自分の仲間とよりもVinelandのスタッフとのほうがよりうまくいきました。結局、スタッフは彼女をいつも支援し、彼女に支援や援助を提供する人たちでしたし、必要なものや欲しいものを伝える相手だったのです。初めのうち、キャロルはある寮母さんと親しくなりました。その人はキャロルのコテージに住んでいて、コテージにいる全ての女性の世話を見守っていた人でした。もちろんその後には別の寮母さんも来ていました。Vinelandが寮母さんの使用をやめた後、昼から夜までの間、異なるシフトによって来てくれる介護担当の女性が他にもたくさんいました。キャロルが時々、ボスのようにふるまうにもかかわらず、彼女はスタッフたちからとても好かれていました。スタッフは彼女に陽気な素晴らしいユーモアで接し、率直に言えば、時々甘やかして接していました。

私が1973年にキャロルの保護者になった後、年四回Vinelandに行きはじめました。二十年近くの間、私たちはたくさんの楽しい時間を一緒に過ごし、私の姉が黙って決めた活動を楽しみました。私は、訪問するときにはいつでも、衣服、レコード、ハーモニカやおもちゃの楽器、また私たちのおやつとしてキャンディー、ピーナッツ、そしてインスタントコーヒーやパンプキンパイのようなものを包装してプレゼントにしたものを買っていきました。キャロルは自分への贈り物を確かめました。それから私の車で近くをドライブしようと頼むのが常でした。それから彼女の住む年長者用コテージに戻りました。そこで私たちはおやつを食べたり、新しいレコードを聞いたりしました。私の訪問はいつも数時間続きました。キャロルは私がすぐに帰ってしまわないか確認しようと、いつも私をじっと見張っていました。キャロルの話ははっきりとしていなく、私は彼女と普段会っているわけではないので、彼女の言葉を理解することは時に難しかったです。しかし、彼女がはっきりと短い言葉を話した時、彼女が何を表現しようとしているかを私はいつも理解することができました。彼女は私のことをとてもよく理解しているように思いますが、私の方としては、コミュニケーションを簡単にするように努めなければなりませんでした。

私たちの母が亡くなってからの間ずっと、私は姉への現在の支援の他に、彼女の過去のつながりを大切にしようと思いました。彼女に最も近い関係であるたった一人の身内として、たとえ母がもはや訪れることがないとしても、私は彼女が他の誰かの人生の一部であるという気持ちを持つことができるように支援しようと努めてきました。私は決して母の死をキャロルに説明しようとしませんでした。というのは、一つにはキャロルが母について決して聞いてこなかったから、もう一つには彼女が死の概念を理解しているかどうかを私が疑っていたからです。しかし、彼女が

自分の家族を覚えていたことがわかりました。私は彼女を訪ね始めた初期のころ、プロが撮った三枚の写真を偶然見つけ、彼らが誰なのかキャロルに尋ねたことがありました。彼女はそれぞれに、正しく「オトウサン、オカアサン、ジャニス」と答えました。（その写真は、私が四歳の時に撮られたもので、今の私とは似ているところが全くなかったのに。）私たちはそれぞれ、自分の道を歩んでいて、それぞれが自立していることを理解していました。しかし、私たちが共に過ごした時間は、私たち二人にとって特別なもののままでした。

親密な家族のつながりが不足していたにもかかわらず、キャロルはVinelandで素晴らしい人生を送っていて、彼女なりに大人になることができたとは私は本当に信じています。1992年3月、キャロルの七二歳の誕生日を祝いました。それは私たちがこのようなことが起こるわけがないと思っていたことでした。彼女が病気になった1991年の中頃、定期的な胸部X線検査によって左の肺にガンがあることが明らかになったのです。生体組織検査によって、そのガンが再確認され、さらに進んだ検査の後、腫瘍を取り除くという結論が出されました。残念ながら、その検査は転移の範囲を示しようがありませんでした。だから、手術は行われましたが、腫瘍を全て取り除くことができませんでした。

キャロルは良い患者で、手術の後順調に回復しました。簡単な化学療法を行うことによって、彼女は重い症状から脱することができました。そして、彼女は数週間でもかなり回復しました。そのころ、別の胸部X線検査によって、ガンが進行し始めていることが明らかにされました。しかしながら、キャロルには呼吸困難がなかったため、彼女の日常通りに、いつもの活動を行うことを許可されていました。彼女は注意深く見守られ、親切で愛情深いスタッフから最高の看護を受けました。

キャロル・バックは1992年9月30日の午後、穏やかに眠るように亡くなりました。彼女は亡くなる少し前の何週間から、だんだん弱ってきていました。しかし、苦しみも痛みも全く見せませんでした。Training Schoolのスタッフや利用者さんによって、お葬式が慎ましく執り行われました。そして、埋葬は彼女の人生のとても多くの時間を過ごしたその地で行われました。私は、彼女がいつまでも愛情をもって、人々の記憶に残っているだろうと思います。

もし私がキャロルの人生を形にする役割を果たしたとしたら、彼女もまた私の人生を形にする役割を果たしたということが正当だと、私は思います。私はキャロルが姉だったので、少なくともある程度はその役割を果たす人であったと思います。私は、人々を、何ができて、何ができないのかということで単純に判断する人間ではありませんし、また、彼らが何を考えているのかとか、どのようにすれば作業を行うことができるのかということで判断しているわけではありません。私たちは、できることをする時に自分なりの手段がありますし、そして自分たちができるようにする方法もそれぞれです。いわゆる「普通」の人のような方法で成功したり、実行したりするための能力を持っていない人々を私は身近に感じていました。しかし、このあとがきを書くことを頼まれた今になってはじめて、私たちはそれぞれ才能があってもなくても関係なく、自分自身の声を持っていて、自分自身の方法で、他の人を支援することができるということがはっきりとわかりました。

キャロルが私にくれたもう一つのプレゼントは、私たちの母のいろいろな思想や多くの行動についての特別な見方です。特に、母の自分子どもたちとの関係性についてある程度理解できま

したし、同様に、世界中の他の子どもたちに手を差し伸べる理由についても理解できたと私は思います。私がこの見方に至ったのはごく最近のことで、キャロルが幼かったころやこのような子どもを生んだことへの母の苦悩について少しわかるようになってからでした。想像してみると、もし母の人生がキャロルのための人生でなかったならば、彼女の人生はどれくらい違っただろうと思います。キャロルを重大な目標にまで到達させようとした原動力は、母の完璧さを求める理由 — その完璧さとは、キャロルの誕生によって引き起こされた無力感を克服するためのものなのですが — によって拍車がかかったのではないのでしょうか。また、この娘を育てていなくてはならないという想いであったのではないのでしょうか。

キャロルが幼いころ、私はパール自身の人生は彼女が満足できるものだとは思いませんでした。彼女は心の奥で、キャロルを育てる別の理由を感じていたと私は考えます。1920年代、結婚、子ども、家族というような普通で、一般的な人生を母が追求しているとき、彼女自身の運命は脇に置かれていました。キャロルの人生はそれらすべてを変え、そしてついに私の母の人生を変えました。それは、自分の娘を育てるための方法を見つけることを余儀なくされた時です。

「母よ嘆くなかれ」は、彼女の子ども、すなわちキャロルが必要とするであろう支援を生み出すために私の母がたどった追求の道に軽く触れている本です。彼女は一人の教師として、そして宣教師の妻としてどのようなものを持ち合わせていたのでしょうか。このジレンマの中で助けになるだろうと母自身がわかっていたたった一つのこと、それは書きたいという願いと書くことができる能力でした。彼女が書くべきことはもがいている姿を彼女が最も感じた人々のことや、また自分にとって身近な人々のこと以外に他にありえただけでしょうか。そのような中で、彼女が目当たりしている、人生のため、そして自分たちの満足のために奮闘していた人々の物語を書きたいという彼女の心のほとぼしりが始まりました。ゆっくりとではありましたが、着々と次のような小説が世に出たのです。「東の風・西の風」(East Wind : West Wind, 1930)、「大地」(The Good Earth, 1931)、「母の肖像」(The Exile :Portrait of an American Mother, 1936)、「母」(The Mother, 1934)、「戦える使徒」(Fighting angel, 1936)、「息子たち」(Sons, 1932)、「分裂した家」(A House Divided, 1935) …

「母よ嘆くなかれ」が求めなかったものといえば、母の書き物が成功することと、時としてその成功によって彼女が家族を援助することが妨げられるということでした。しかし、真実は、彼女はすぐさま自分の小説によって知られるようになり、ごく短い間にピューリツァー賞やノーベル賞によって大いなる栄誉を受けました。彼女は世界の人々を気にかけて走り続けて、さらに自分の心をつかんだたくさんの社会の出来事を調べるといった目的において手を抜くことはありませんでした。彼女の人生はつまるところ意味があったということでしょう。

パールの書いたものは好評で、商業的にも成功したので、彼女は自分の子どもや自分自身の家計をまかなうことができただけでなく、新しい家族を養うことができました。Vineland Training Schoolで、母はキャロルのコテージの建設のための資金を寄付しました。それは十六人が泊まることができるものです。キャロル自身が住む部屋に加えて、そのコテージにはほかの利用者のための複数の寝室、複数のお風呂場がありました。また、広い談話室、広いダイニングルーム、食事を準備するためにちょうどよい広さのキッチン、そして寮母さんのための専用の部屋がありました。さらに、母パールはキャロルがこのTraining Schoolに居続けることができるように終身滞在契約を結びました。当然ですが、母はキャロルに衣服、おもちゃ、写真、ローラースケート

そして私の姉がほしがったり必要だったりしたほかのどんなものでも与え続けました。そして、彼女はこの本の第一版の印税をおそらく募金として、このTraining Schoolに寄付しました。

パールは彼女の二番目の夫と新しい家族にとって、つまり、結局私を加えた六人の養子を含む大家族のために、一家の主な稼ぎ手になりました。彼女は古い農家の屋敷を改築し、新しい土地を得ました。そして、たくさんの使用人の給料も支払いました。その間ずっと、彼女は執筆活動、家の中と外での社会活動、彼女がサポートしている運動のための講演の約束、そして多くのその他の活動をするという忙しい毎日を過ごし続けていました。

残念なことに、とても多くの人に援助の手を差し伸べざるを得なかったため、母自身が家族のために何かをするという時間はありませんでした。彼女は私たちの経済的なニーズを満たしてはくれましたが、私たちの心のニーズに気を配るための時間が時としてないことがありました。彼女は、自身の執筆や投書に答えるための誰にも邪魔されない時間を得るために、分刻みに時間を管理する必要がありました。そして、私は思ったのです。たとえ母が私たちと一緒に過ごす時間があつたとしても、母は私たちとは違うもう一つの世界に住んでいるようでした。そして、母はありふれた家族の毎日の生活を本当に理解しているとは思えませんでした。母はスポーツのような平凡な喜びの中で、私のきょうだいたちや私が得ていた楽しみに応じてくれるには見えませんでした。そして、そのような遊びの中での上達をめったに認めてくれませんでした。彼女は何よりも知的探求を大切にしました。そして私たちの誰もが知的に優秀であるわけではなかったので、私は思うのですが、きっとある意味、私たちは彼女を失望させたのでしょ

う。私の母は人生の様々な部分のバランスを保つことに最善を尽くしていました。しかし、私たちみんなが知っているように、私たちの人生はそれなりのものでしかなかったのでしょうか。母の死が近づいた時になって、ようやくはっきりと理解したのですが、彼女はすべての人々と心を通わせていたにもかかわらず、自分の人生をより充実させたであろうより細かな点に精を出すことができていませんでした。私の母は安らかに亡くなったようでした。しかし、彼女はかなえられていないたくさんの夢を持ちながら亡くなったと私は思います。

その最大の夢の一つは、私はこう思うのですが、それは自分の子どもたちに教えることだったと思います。つまり、私を含めて子どもたちは、複雑に入りこんだ彼女の人生を理解していなかったし、彼女が世界の中で自分が果たすことができたと感じていた役割を理解していなかったのです。

この素晴らしい女性、それはつまり私の母なのですが、他には考えられない大きな遺産を残しました。しかし、同時に、母は癒しが必要になるような人生を私たち子どもに残しました。私のきょうだいたちや私、すなわち私たちが自分たちの産みの母や父によって見捨てられたことは否定できませんし、その後も養母であるパールによって見捨てられたと感じたのです。また、私たちが見捨てられたことにおいて、キャロルは知らず知らずのうちにある役割を演じていたことを否定できません。つまりそれは、キャロルがいたために私の母が執筆に走ったという理由だけなのですが。私のきょうだいと私は親密ではないばかりか、彼らはキャロルや彼女の人生についてもほとんど何も知りませんし、またキャロルと私との間のきずなについても知りません。みんないつもばらばらでした。それは彼らがキャロルに関心がないからではなく、もっぱら私の母がきょうだいたちをキャロルの人生に巻き込まなかったからです。私の幼いきょうだいはほとんど十七歳もキャロルの年下なので、キャロルと触れ合ったのはキャロルがペンシルベニアへ夏の短期

間の帰省をした時だけでした。それは彼らの世界の一部ではないですし、彼らが関与することを全く期待されていない別世界でした。もちろんそれは、私がキャロルより先に死んでしまわないという前提の話です。

このようなわけで、私がこのあとがきを記したのは、キャロルの人生の最新情報をお知らせするためばかりではなく、私の母が自分の人生をどう生きたかをお話するためでもあるのです。そうすることによって、私は自分のきょうだいたちや、私の母の人生をよく知っているそのほかの人たちに過去の出来事を理解してもらう手伝いがしたかったのです。母のあからさまな無関心によって私の弟たちと妹たちはよく傷つけられていましたし、さらに、自分たちがどのようにして母の人生にはめ込まれたのかを理解できていなかったのです。真実はこうです。彼女は彼らを意図的に傷つけるつもりはなかったのですが、彼女は自分自身の人生に意味を持たせる必要があったのです。自分の人生に意味を持たせる彼女の最も主要な方法の一つは、自分からものを言えない人々を支援することでした。それは、世界中のマイノリティの人々や迫害された人々でもありますし、また、私の姉のようにゆっくりとしか学ぶことができない人々のことです。著名人として、彼女は世界中の人々と心を通わせることができましたし、さらに、思いやりや心配りを広く示すことができました。彼女は自分の挑戦に耳を傾け、受け入れてくれるすべての人々をもっぱら大切にするという遺産を残すことができました。もし、彼女がキャロルを産んでいなかったら、この遺産は別のものだったでしょうか。もちろん、断言することはできませんが、私は、その答えは「yes」だと思います。

III. 訳者による解説及び注釈

- (1) Vineland Training School : アメリカ、ニュージャージー州ヴァインランドにある知的障害、発達障害のある人々の生活自立を目指した教育を目的とした非営利団体。1888年に正式に開校し、初代所長はS. ガリソン。精神薄弱（ママ）の分野における教員や職員の養成について貢献し、精神薄弱（ママ）施設や学校の設立や、障害に関する研究・調査、検査などで多大な役割を果たした。
- (2) ロッシング・バック : John Lossing Buck。南京大学で教鞭をとっていた農業経済学者兼宣教師。1917年にパール・バックと結婚。キャロルの子育てをめぐりパール対立し、1935年に正式に離婚。
- (3) 南京大学 : 1902年に「三江師範学堂」として設立。1906年に「両江師範学堂」、1914年に「南京高等師範学校」、1921年に「国立東南大学」、1927年に「第四中山大学」、1928年に「国立中央大学」と名称が変遷し、1950年に「南京大学」となった。1902年設立の「三江師範学堂」の起源は三国時代の呉が258年に開設した「太学」にまで遡り、世界最古の大学の1つといわれる。教育部の直轄重点総合大学として、教育、科学研究のいずれの領域も、全国のトップレベルに位置している。
- (4) Antioch大学（アンティオークカレッジ） : 1852年、一般教育中心の非宗派的の共学制大学として、アメリカ、オハイオ州イエロースプリングズに創立。初代学長は H. マン。学生を研究と実務に交互に従事させて、両者の有機的結合を目指すいわゆるアンティオーク・プランの創業校としても有名。

- (5) PKU（フェニルケトン尿症）：PKUは、フェニルケトン尿症（Phenylketonuria）の略称。アミノ酸代謝異常症の一つで、必須アミノ酸であるフェニルアラニンをチロシンというタンパク質に変える酵素が先天的に欠損しているために起こる。適切な治療により、正常な発達・発育が期待できるが、無治療では、精神発達遅滞、精神症状、鼠尿様の強い尿臭などの症状や、髪の毛や皮膚が薄くなり、湿疹やけいれんがみられる。頻度は約8万人に1人で、常染色体劣性遺伝である。

文献

- 1) J. David Smith (1992) 著・西村章次 監訳, 広瀬信雄・玉井邦夫 他訳 (1995) 知られざる声 障害者の歴史に光を灯した女性たち. 湘南出版社.
- 2) 三井紀久子 (1991) 母としてのパール・バックとその障害児観. 精神薄弱問題史研究, 34, 31-38.
- 3) Pearl S. Buck著・松岡久子 訳 (1950) 1973年版 母よ嘆くなかれ. 法政大学出版局.
- 4) Pearl S. Buck著・伊藤隆二 訳 (1993) 母よ嘆くなかれ. 法政大学出版局.
- 5) Pearl S. Buck (1950) The Child Who Never Grew. James A. Michener (1992) The Child Who Never Grew. Woodbine House.